

〔研究ノート〕

中山忠光考——天誅組拳兵以前を中心に

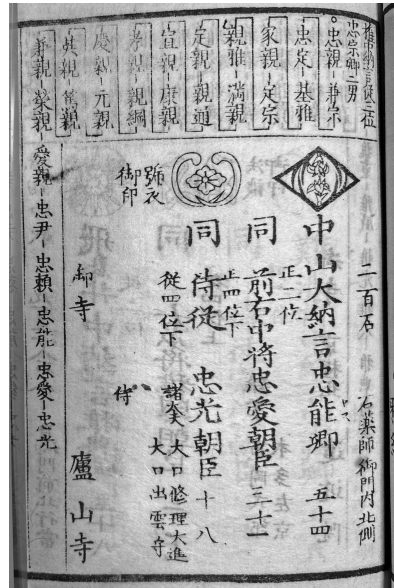
中 村 武 生

はじめに

本稿は文久三年（一八六三）八月から九月にかけて和州吉野郡で起きた天誅組の乱を論じる前提として、主将である前侍従中山忠光（一八四五～一八六四）の拳兵以前の政治活動を考察するものである。

同年、長州毛利家は奉勅攘夷の立場をとり列島での海防体制を主導してきたが、五月から六月にかけて下関での攘夷戦に敗れた。その威信挽回のために選んだのが攘夷親征論で、八月一三日、大和行幸発令をみた。しかし因州鳥取侯池田慶徳ら反対者は多く、妨げられる可能性があった。その危機意識による妨害回避等のために起こされたのが天誅組の乱である。

35 実際、直後の八月十八日政変により大和行幸は無期延期となった。在京毛利家の多くが離京して国元に戻り、親長州の立場にあった三条実美ら七人の廷臣も出奔して同行した。毛利家は挽回のための施策を種々開始する。



『大正山陽通覧』(1862)版『雲上明覽大全』
下卷(弘通書林、江戸日本橋通山城屋
佐兵衛ほか)の中山家の項(筆者蔵)

その混乱のさなか四〇日目で鎮静されたためか、後世天誅組は「討幕の先駆」などと評価されつつも、おおむね政治史から独立した一内乱でいどの扱いしかされてこなかった¹⁾。あらためて検討すべきである。

そこで中山忠光の行動に注目する。羽林家のひとつ中山家の当主権大納言忠能の五男で、のち長兄忠愛の養子となる。文久二年(一八六二)刊行の『雲上明覽大全』下卷(三十四丁)の同家の項には、忠能・忠愛と並んで忠光が載り、付された嫡流系図にも「忠能—忠愛—忠光」とあって、忠能の嫡孫(将来の当主)として遇されていたと判断できる。

あわせて無視できないのは姉(養叔母)慶子が祐宮(陸仁。諡号明治天皇)の生母である点である。忠光は外叔(養従兄弟)にあたる。そのため万延元年(一八六〇)七月一〇日、祐宮が皇太子(儲君)となった際、次兄(養叔父)正親町公董らとともに儲君祓候に選ばれた(忠能は儲君御肝煎)。陸仁との密接な関係は留意すべきである。

正親町季董『天忠組の主将中山忠光』²⁾は生涯全体を扱う唯一の伝記で、基礎的事実が提示されたが、網羅的ではなく遺漏が多い。先行研究は、文久二年九月、「五奸」(九条尚忠、久我建通、千種有文、岩倉具視、富小路敬直)が禁裏から排除される契機、および翌年二月、関白鷹司輔熙に強訴するなど將軍家茂上洛前でありながら將軍後見職一橋慶喜、政事総裁職越前春嶽らに強引に条約破棄期限を約束させる契機をつくった人物として位置づけるが、その後、公董らとともに

に国事寄人選ばれ(同月一三日)政治活動の正当性を得て以後、出奔して長州へ下向するまでの活動に言及がない。長州での活動も白石正一郎日記などを根拠に「手がつけられない」暴走ぶりばかりが目され、当地での政治的意義はほとんど論じられない。帰京後、挙兵までも同様の感がある。以下、毛利家との関係を中心に論述する。

一、国事寄人としての活動

文久三年二月以前、禁裏は、国事掛を中心に徳川公儀の権威失墜を進めていた。危機感をつよめた越前春嶽は、同月一九日、慶喜、守護職会津容保、山内容堂、伊達宗城らに、禁裏に対して政治・外交権の公儀への委任を認めなければ家茂の辞職、政権返上を行うと提起し、同意を得た。中川宮からも理解を得る。宮は関白鷹司と前関白近衛忠熙のほか、議奏、武家伝奏、国事参政、国事寄人らと議論すれば必ず決すると述べながら、相手は「手強き方」と付した。議奏三条実美や忠光ら、さきに鷹司関白に強訴した者であろう。

二一日、近衛、鷹司、宮、慶喜、春嶽らが集会した。春嶽の述べる趣旨に鷹司は「一々御尤至極」と理解をしめすが、「即闕(決)」の状態で関白としての「威権(厳)」はなかった。条約破棄期限を春嶽らに強引に決めさせた件について、自身も強く迫られたのだと「時々甚嘆息」した。近衛は、天子(統仁、諡号孝明天皇)がお気の毒だと落涙し、「御侍従も尽く激烈多く御迫り」、「近来ハ女房而已被召仕」⁵⁾っていると言った。この時期の侍従は、忠光、四条隆譚、裏辻光愛、橋本実梁らである。天子が彼らにどう対していたかを知れる。

「五奸」ら排斥のおり、近衛に対して忠光は、「種々之儀強情被申立」て「返答」すれば「一々不承知」で、鷹司らの「因循之罪」を問い、あわせて「両嬪三奸之取計」が「不行届」である、「一兩日ニ各流罪」にしなければ「諸有志不

「穩」だと脅した。宮についても「国賊」だと「誠ニ何共無申条強情トント合手ニ成カタキ次第」で、「返答氣ニ不入トテ」立ち去った。近衛は「実ニ困々入候人物」と評する⁶。前関白に対しても遠慮なく政敵を弾劾するのである。

二、長州へ出奔

三月一日夜、忠光が長州屋敷に現れる。「余程御切迫之御様子」であったが、具体的には知りえない。直後に目立った動きはなく、四日の家茂着京をへて、一日の加茂行幸にも供奉している⁸。

ところが同月一九日、突然出奔する⁹。この間、一三日に土佐山内家の武市半平太や吉村虎太郎を訪ね、学習院に寄ったあと参内し、帰りに久坂玄瑞や国事参政姉小路公知を訪ねた。帰宅後にも久坂のほか肥後細川家の住江甚兵衛、宮部鼎蔵がやってきている。一五日は姉小路と国事参政東久世通禧を訪ねたのち参内。帰宅後か、吉村が訪ねてきたので会っている¹⁰。これら交流が出奔と関わるのか不明である。

同月二一日、忠光は大坂で「不図」久坂・入江九一と出会った¹¹。中国・九州地方へ下り有志を募るつもりと述べた。事実なら組織的な軍事行動を見込んでいたといえる。久坂らは常安橋南詰の長州蔵屋敷に誘引し、帰京を勧めた。が、応じなかった。そのため入江が同伴して出港し、二七日に萩城下に着して、前田孫右衛門方に入った。このさなか侍従の辞官および従四位下の位記返上を申し出ている。

当主毛利慶親は、三ノ丸の川手御殿を忠光の居館にあて厚遇した。禁裏に対しても事態を報じている。山県小助（有朋）は、忠光の「御遊学願ひ按察使之例等を以朝廷え御建白」し、出奔を公務のように対処させるよう主張した¹²。

ところが、二九日夜、失踪する¹³。三日後（四月二日）、下関竹崎の白石正一郎方に現れるが、単身ではなかったよう

で、前日昼、檜崎八十槌が忠光来訪予定を伝えた¹⁴。翌日、宮城彦輔ほか二人を同伴して白石方に入ったが、夜八ツ過ぎ、にわか長府へ向かう。宮城や小山寛平らをとめない戻ってきたのは八日夕である。同月九日には、弁持持参で筋ヶ浜に遊覧に出かけた。夜に激論となり、夜明けに帰宅して断食を開始した。周囲がなだめたのか翌日には機嫌は直った。実に感情の起伏が激しい。

下関から連絡を受けた萩政府は、「萩御滞中追々御相對仕都合御様子も存¹⁵」じている土屋矢之助を派遣した（二三日下関着）。すると二四日夜、また立腹し飛び出した。宮城、檜崎、土屋らが追いかけて、夜明けに戻ってきた。

その後も長府や清末に出かけていたが（一五日、一七日）、二五日、萩に移る。萩政府は忠光の扱いに苦慮していた。それでも放逐しなかったのは、忠光への関心の高さであった。「末御壯年」の立場で「正義」を「持詰」めて「斯迄之御身と成果」てた「御心事を察し候得は不堪感泣」と同情・感激を示す。縉紳の立場を捨てて国事に奔走する公家はこの段階では皆無であった。そのため「規則を」守って「御才徳を養ひ」「今一層も御成達可被成」よう願う。「他日朝廷之御強ミに茂可相成」と期待したのである¹⁶。

ただ現実には制御困難であった。二七日、土屋は久坂に訴えた。自身は「多病之身体」ゆえ「とても侍従卿の健剛は敵しかた」い。「卿之御正議は奉恐人」が「惜哉御若年故御定心乏敷御付之面々も折々」困り果てている。だから「兼而御懇切」の関係にある久坂に「能々御諫諍有」りたいと願った¹⁷。

忠光の久坂への信頼は厚かったようだが、久坂がどのくらい諫めたか不明である。以後も忠光の激しさは劇的にはひそめてはいない。

その間の二〇日、家茂が条約破棄期限を五月一〇日と奏上したため、報を得た久坂が山口から下関に入る。土屋から聞かされた忠光は下関へ向かった。あわせて真木和泉が主家である久留米有馬家に軟禁されたと知り、同地へも向かお

うとしていた。¹⁸⁾

白石方に戻ったのは四月二十九日(晦日)である。久坂らも合流した。五月一日、久坂そのほか四〜五名をともし彦島の台場を検分した。二日は体調をくずしたようだが、三日に萩から来た竹内正兵衛と会っているので回復したと思われる。四日、七〜八人を連れて狐狩りに出かけ、昼すぎに帰宅したが、「例の御くじ」¹⁹⁾が起き、小山と白石弟の廉作が不興を蒙った。夕方、水戸や伊予大洲の者も含めて有志二〇人ほど来て酒宴が開始されたので「御くじ」は鎮まったのかもしれない。翌日は光明寺滞在の有志が約三〇人来て大酒宴があり、六日また狐狩りに出かけた。条約破棄期限は四日後である。当日、久坂ら光明寺党は関門海峡でアメリカ商船ペンブロークを砲撃した。攘夷戦の開始である。しかし忠光は不在であった。前々日(八日)、真木の釈放を求めため計八人で久留米に向かったのである。有馬家は忠光を軽視した。一二日、家老有馬主膳らとの対面予定がくつがえされた。忠光は「大ニ被怒国賊可棄」と翌日「朝五半時頃被立去」た。有馬家では「跡ヨリ大騒キ」になり、「昼過より早馬ニテ呼返」²⁰⁾そうとしたが忠光は応じなかった。途中で追いついて詫びた有馬家の使者をともなつて、一七日、白石方に戻ってきた。

ただ同日、真木の釈放は実現した。釈放を望む関白鷹司の内旨が毛利家を介して届けられ、毛利家も強く主張し、あわせて石州津和野侯亀井茲監も使者を送って後援したためである。²¹⁾

三、下関攘夷戦争

下関に帰着した六日後(二三日)、フランス軍艦キャンシャンが関門海峡を通過しようとした。長州勢は再び砲撃した。これに忠光は参加した。たまたま土佐の樋口甚内が近辺に宿していた。砲声がみだりに聞こえたので、「土佐ノ者

ナルカ御加勢」を希望したところ、「侍従公ハ御満足ニ被思召ヨシニテ即台場入ヲ許サレタ」。そののち敵艦から「打シ大玉侍従公ノ傍ヲカス」った、つまり忠光は前面に出張っていた。攘夷の戦場に実際に立った公家出身者は忠光のみである。下関有志やその支持層は憧憬したであろう。停戦後、「其夜宿マテ退」いた樋口の「旅宿へ侍従公ヨリ御使者賜ハリ御挨拶」があった。⁽²²⁾ たまたま参加したにすぎない樋口に使者を送って慰労した。このような配慮も忠光を理解するうえで無視すべきでない。

二六日、オランダ軍艦メデューサが関門海峡で砲撃される。前田台場に布陣していた忠光はこれにも参加した可能性がある。伝聞情報ではあるが、権中納言八条隆祐は「中山忠光（略）去月廿六日長州戦争之節乗船ニテ致指揮居シト慥ニ長州ノ家来申セシ由」と記録した。⁽²³⁾

三〇日（晦日）、世子定広が彦島台場を巡検したため、忠光や清末侯毛利元純も参加する。ここに禁裏朔平門外での姉小路公知の遭難・死亡の報が届いた。⁽²⁴⁾ 忠光は「姉小路卿御災難之趣相聞已に輦轂之下及紛乱候様相響き不取敢御上京」すべきと判断した。⁽²⁵⁾ 翌日、にわかには京を世子にはかり、即日出発した。⁽²⁶⁾

これに光明寺党など約二〇〇人の有志が供奉した。⁽²⁸⁾ それは下関有志の「過半」⁽²⁹⁾ で、「残る者僅に数人」⁽³⁰⁾ と認識された。『修訂防長回天史』は、同日起きたアメリカ軍艦ワイオミングの敗戦の要因を忠光が去り「士氣が頓に振は」なかったためとしたのは注目される。⁽³¹⁾ 忠光帰京の影響の大きさに留意すべきであろう。

四、帰京

六月七日、大坂に着いた忠光は、供奉者の多くをとどめ、二〇名⁽³²⁾ で伏見へ向かう。京着は八日である。

この時期、老中格小笠原長行が約一千を率い強引に上京しようとしていた（大坂着は一日）。四日、洛南淀まで進む。入京阻止のため老中水野忠精や守護職会津家臣らも淀に入る。危機感をもった禁裏は、七日、毛利慶親・定広父子に上洛要請する。それを受けて即日久坂玄瑞が離京した。

先行して親長州の在京有志も、慶親父子の上洛要請のほか、「西国之志士ヲ募り、朝廷之基本ヲ堅むる」ため四日離京した。土佐の吉村虎太郎・上田宗兎・土居佐之助・池内藏太、三河刈谷の松本奎堂・宍戸弥四郎・伊藤三右衛門（三弥）、肥後の竹志田熊雄、筑後久留米の清水真卿（古松簡二）・池尻作藏（獄五郎カ）らである。⁽³⁵⁾一行は五日大坂に着き、乗船する。下関着は一二日である。このうち吉村、池、池尻、真木菊四郎、松本が、一四日山口で慶親父子に謁見する。⁽³⁶⁾宍戸、上田、竹志田は九州に渡って豊後岡侯中川家に接触し、長州の動向を伝え、同家の意向を問うた（一八日）。他の有志も各地で同様の動きをしたらしい。⁽³⁷⁾

ここに挙げた大半がのち天誅組拳兵に参加するのを見逃してはならない。彼らがいかに拳兵へ及ぶかは定かではないが、無関係とは思えない。この考察は課題としたいが、この時期、彼らと忠光の接触が物理的に困難な点のみ指摘しておく。のちの天誅組首脳たちと拳兵にむけていつ交流するかに関わる。

なお小笠原は、家茂による停止の親書が発せられたため（五日）入京を断念する。一〇日ごろまでは淀にいたが、一三日以前に大坂城代屋敷に幽閉された。同日、家茂は大坂から軍艦で帰府する。

この渦中に忠光は入京する。河原町通押小路下ルの長州屋敷に入った。太田市之進ら一七名が供奉した。⁽³⁸⁾その日のうちに三条実美と東久世通禧に会った。忠光は、しばらく長州屋敷に控えているので「非常之節朝廷之御守衛可申上」と述べた。その姿勢は「是迄トハ違、惣て地下同様ニ被致居候由、議論なども中々是迄トハ大違」이었다ため「一同伝聞大感心」したと公董は聞かされ安心した。⁽³⁹⁾

翌九日、訪ねてきた真木和泉に忠光は、摂海の「御海岸御備」が手薄なので「湊川御受持場巡覽」をするため帰京した、その他の「御用等も」あれば「可承旨被仰立候者大ニ御都合も可宜」ので、禁裏へ伝えるよう依頼した。³⁸

毛利家は忠光を手元に置きたかった。そのため一日、佐々木男也を忠能に派遣し、屋敷至近の木屋町通に潜居させていると伝えた。三条と話し合ったうえで潜居継続の意思を述べたところ、忠能は中山邸に引き取り禁裏の処分を待ちたいと望んだが、佐々木はしばらく知らないふりをしておくよう求めた。³⁹

一二日、忠光は学習院で東久世や烏丸光徳ら一〇人と会い、京都の様子を聞かされた。姉小路暗殺や小笠原の事態は「左程之事モ無」いと聞き、いますぐ「可発動時節ニモ無」いと感じたため、大坂に控えさせている「貳百人之藩士ハ先可帰長州」よう判断した。⁴⁰

これに対し在大坂の「有志輩」は、同月五日に下関で再び敗れた情報を得ていたため、忠光の同伴を希望した。鷹司関白に「強訴」してまで「懇願」しようとしたらしい。⁴¹ 忠光も応じようとした。しかし真木は反対した。一三日夜、忠光を訪ね、「再下馬関之説」をはばんだ。⁴² 結局、忠光はこれに従う。有志は帰国した。

禁裏は忠光の復官を認めなかった。しかし「森秀斉卜申長州ノ人」として学習院から毛利家へ褒詞を発した。⁴³

五、攘夷親征論

毛利家が忠光を滞京させたい理由のひとつに、攘夷親征への活用意図があったと見込んでいる。過る五月三〇日、防州山口で真木和泉が慶親に発案して以後、⁴⁴ 具体化が始まっていた。六月一七日、洛東靈山翠紅館に真木を招き、清水清太郎、桂小五郎、佐々木男也、寺島忠三郎らが攘夷親征を論じた。

一方、山口では先の勅命に従い、慶親父子に代わって益田弾正と根来上総の上洛を決めた。その際、父子の親書が益田に託された。その冒頭に攘夷親征論が載せられている。⁽⁴⁵⁾

一、外夷へ対し既に開兵端候付乍恐被遊御親征石清水へ出御諸国へ降勅勤王之兵を被召集御指揮を以掃攘被仰付於大樹公も掃攘之事業被為在度候事

注目すべきは二項目で、

一、皇太子を被為立堂上方にて人才御選挙御輔佐被仰付度候事

附、中山忠光此内帰洛に付御輔佐之任可然に付申立之事

とある。つまり毛利家は、攘夷親征のおり陸仁の補佐を忠光に任せようとした。忠光は陸仁の外叔（義従兄弟）である。忠光と慶親父子は「親友懇切之間」⁽⁴⁶⁾でもあり、忠光を介して毛利家は陸仁と懇意になろうとしたと読み取れる。将来の陸仁踐祚も意識したと見込まれる。そのためにも毛利家は忠光を滞京させ、早く本復させる必要があった。おそらく忠光にも明かされたのではないか。

同月二八日、長州屋敷は「強訴」して本復を実現させようと忠能に打診したところ「違法之罪」だと断られた。⁽⁴⁷⁾毛利家は受け入れず、翌日、家老清水清太郎と京都留守居役村田次郎三郎は武家伝奏野宮定功・三条実美に頼って宥免を歎願した。⁽⁴⁸⁾この段階では本復ののちに忠光を中山邸に移す予定であったが、その後事情が変わり、本復を待たず七月五日夜に帰邸させる。⁽⁴⁹⁾

忠光を直接監視できなくなったため、七月七日朝、毛利家はさっそく真木を派遣し制御している。忠光も応じ、「大に鎮静」⁽⁵⁰⁾していた。翌日は久坂玄瑞が中山邸を訪れている。日をおかず長州屋敷関係者が来邸した。一〇日は真木と清水某（清太郎カ）が単に訪ねただけではなく、「孝経」を講義している。⁽⁵¹⁾

そのようななか一八日に吉村虎太郎が訪問している点が注目される⁽⁵²⁾。吉村との交流は長州への出奔以前にさかのぼるが、帰京後はここまで接触はなかった。天誅組拳兵一カ月を切ったこの時期、関係者の接触が始まった。これ以後吉村も日をあけず中山邸を訪ねる。

この時期、在京毛利家の排除などを目的とした越前松平家の率兵上京の噂が毛利家や親長州有志に把握されている。

真木の門人半田門吉らの越前探索報告書を河原町屋敷が入手するのが七月一日である。これを受けて桂小五郎が二条城東大手門前の越前屋敷を訪ね様子をさぐるのが二一日、越前春嶽の旅館と見込まれた高台寺を親長州有志が放火するのが二六日、江州大津における越前春嶽の蔵元で定宿でもあった矢嶋藤五郎方が襲撃されたのは八月二日である。越前家の率兵上京に対する示威活動と天誅組拳兵には密接な関係があると見込んでいる。あわせて七月末、三条の求めに応じ、宮部鼎蔵らが越前家の率兵上京を妨げる名目で攘夷親征実現を禁裏に訴えている点から、両者も不可分の関係にあったといえる⁽⁵³⁾。

同月一九日、久坂が忠光の「為御見廻珍重持参仕種々御話申上」げたが、忠光は「甚御不平」を申し、忠能も「御取押へ被成御入り」になった⁽⁵⁴⁾。久坂の発言の何に強く反発したのであるうか。二二日、反省したのか、久坂と寺島に対して菓子を送っている⁽⁵⁵⁾。同日、吉村は忠光を訪れた⁽⁵⁶⁾。以後八月一三日にかけて、吉村と久坂・寺島が競うように忠光と接触しているように感じられる。忠能日記などの当該箇所を一覧にしたものが別表である。忠光の出奔を警戒している久坂・寺島、どの段階で和州拳兵を決めたかは不明だが、自陣営に取り込もうとする吉村らのせめぎ合いのように見える。忠光は三月の出奔の際に西国に下って有志を募ろうとしていた（既述）。久坂・入江に止められて断念し長州へ下った。「一旦跡を草野に匿し必死を以て国家万一之御報恩可仕心得に御坐候処天時未至逆賊免誅各々帰国仕候段遺憾無申計」⁽⁵⁷⁾はこのときの吐露であった可能性がある。吉村らの具体的な誘い文句がどのようであったかは定かでないが、天誅組拳

【表】文久3年7月23日～8月13日、忠光と久坂義助（玄瑞）・寺島忠三郎、吉村虎太郎らの接触

7月23日、「寺嶋忠三郎、一忠光来談」（「忠能」、98頁）	
同月26日、「義助事中山家え罷出候事」（「京師日載」）	※この夜高台寺放火
同月27日、「吉村寅太郎忠光面談」（「忠能」、106頁）	
8月2日、「寺嶋忠三郎・井澤小六来面忠光」（「忠能」、112頁）	※同日、矢嶋一件
8月7日、「嶋原老士尾崎藤五郎忠光面談云々」（「忠能」、116頁）	※尾崎は天誅組参加者
8月8日、「入夜忠光向玄瑞旅宿留主不面由也」（「忠能」、118頁）	
8月9日、「忠光向玄瑞旅宿由也」（「忠能」、119頁）	
8月10日、「忠光如昨申出、臨期向東久世・烏丸等云々、為之如何」、「吉村寅太郎忠光面談」（「忠能」、120頁）	※東久世は通禱、烏丸は光徳
8月12日、「吉村寅太郎忠光面談」（「忠能」、122頁）	
8月13日、「忠光向烏丸由也、父前大納言所勞危急不面由也」、「吉村寅太郎忠光面會」（「忠能」、125～126頁）	

注：頁数は日本史籍協会編『中山忠能日記』第一のもの。「京師日載」は山口県文書館蔵毛利家文庫。下線・読点・中黒は中村

兵はそれを可能にするもので、陸仁を補助して城南八幡や摂海に出張するよりも魅力を感じたのではなかったか。

八月一三日、攘夷親征を前提にした大和行幸が発令される。

翌日忠光は出奔し和州へ向かう。忠能への書き置きには事実を記さなかった。「四国へ下り攘夷之形勢相考」⁽³⁸⁾えるとある。

忠能は引率者を見抜いたようで、すぐに木屋町三条の吉村方を調べさせたが忠光の姿は無かった。真木もこれに同行した半田門吉ら自身の門人たちの動きを把握できておらず、「此夜子弟六人亡」と日記に記した。⁽³⁹⁾

むすび

本稿では天誅組研究の前提として主将中山忠光の動向について拳兵以前を中心に考察した。まとまった意見書などが残されていないため、具体的な政治的見解などは不明だが、大政委任を求める一橋慶喜や越前春嶽らの意向を妨害する立場にあり、実現のためには天子や近衛・鷹司など撰家にも遠慮しなかった。長州への出奔の理由もよく分からない。西国での有志募兵を

目指していたようで、事実なら約五ヵ月後の天誅組拳兵の萌芽として注目すべきであるが、大坂で久坂玄瑞らに邂逅し意見されるとあっさり翻意し長州へ下った。

長州行は西洋艦との戦闘を意識したと思われるが、萩・下関・長府・清末などを時間の配慮もなく頻繁に移動し、またすぐにへそを曲げて一両日の無言・断食を行ったり、居宅を突然飛び出すなど毛利家政府や関係者を混乱せしめた。

ただ単なる我が儘と忌避されなかったのは、縉紳の立場に目もくれず国事行為に邁進しようとするひたむきさであったといえる。目先の横暴に耐えてでも禁裏や天下のために育成する意義を見出したものと判断できる。

それを明快に示したのが、下関での攘夷戦であったであろう。敵艦の放った「大玉」が「傍ヲカス」る場に立ち、臆さなかった。有志たちには頼もしい主将に見えたと想像する。姉小路公知の横死を聞き、戦争継続中にもかかわらず即日帰京を決めた際も、反発されるどころか有志約二〇〇人が同行するほど収攬している。それだけが要因ではないが、忠光帰京にともなう兵員の極端な欠如が対西洋艦敗北に影響した点はこれまで等閑視されてきたといえる。

敗戦による毛利家の威信回復のために発案された攘夷親征でも忠光は存在を示した。天子統仁とともに出陣する皇太子睦仁の外叔(養従兄弟)として彼を補佐する堂上として期待された。すでに忠光は毛利家当主慶親父子と「親友懇切」の関係にあった。毛利家は忠光を介して統仁・睦仁父子との密接な関係が構築可能と見込んだのではないか。

しかし忠光が自覚したかは疑わしい。攘夷親征の実現に尽力する久坂や真木和泉らの思いを踏みにじるように吉村虎太郎らの誘いに応じて天誅組拳兵に走るのである。

とはいえ天誅組拳兵も攘夷親征(大和行幸)を反対者から守護する目的があった。忠光は真木や久坂とまったく異なった道を選んだつもりはなかったのかもしれない。この検討は別稿に譲りたい。⁽⁶⁾

注

- (1) 原平三「天誅組挙兵始末考」(『史学雑誌』第四八編第一〇号、一九三七年、一二五〇頁)。明治維新史研究者による専論といえるのは、原前掲論文、同「贈正五位水郡長雄事績考」(『歴史地理』第六八卷第六号、一九三六年)、東義和「文久3年の社会情勢―天誅組の乱に関する覚書―」(『歴史学研究』三六五号、一九七〇年)、時野谷勝「天誅組考」『専修史学』一四号所収、一九八二年)など。
- (2) やまと刊行会、一九三一年
- (3) 原口清「幕末中央政局の動向」一(同著作集1)、岩田書院、二〇〇七年、一六四―一六五頁。町田明広「幕末文久期の国家政略と薩摩藩」、岩田書院、二〇一〇年、一四三頁。刑部芳則『公家たちの幕末維新』、中央公論社、二〇一八年、一二五―一二六頁、一四八―一五〇頁
- (4) 「枢密備忘」同年二月一九日条(『大日本維新史料稿本』(以下稿本、東京大学史料編纂所データベース「維新史料網要」)同月二二日条、910コマ)
- (5) 前掲4「枢密備忘」同年二月二二日条(「稿本」同月二二日条、916コマ)
- (6) 宮内庁蔵版『孝明天皇紀』第四、平安神宮、一九六八年、三七八頁
- (7) 日本史籍協会編『木戸孝允文書』一、東京大学出版会、二〇〇三年覆刻、二九七頁
- (8) 日本史籍協会編・刊『中山忠能日記』(以下『忠能』)第三、一九一六年、五〇九頁
- (9) 前掲8「忠能」第三、五一八頁
- (10) 前掲8「忠能」第三、五一〇―五一二頁
- (11) 末松謙澄『修訂防長回天史』四卷、マツノ書店、一九九一年復刻、六四―六六頁

- (12) 一坂太郎・道迫真吾編『吉田年麻呂史料』、マツノ書店、二〇二二年、一一五頁
- (13) 前掲11『修訂防長回天史』四、七五頁
- (14) 「日記中摘要」(下関市教育委員会編『白石家文書』、一九六八年、八八〜九四頁)。以下、下関での行動はとくに言及しないかぎり当記録に拠る
- (15) 「毛利家史料」〔稿本〕同年四月二八日条、403コマ)
- (16) 「毛利家史料」〔稿本〕同年四月二八日条、410コマ)
- (17) 日本史籍協会編『楫取家文書』一、東京大学出版会、一九八四年覆刻、二二六頁
- (18) 「毛利家史料」〔稿本〕同年四月二八日条、409コマ)
- (19) 「くじ」とは「子供がわからないことをいってすねること」(中原雅夫『幕末の豪商志士白石正一郎』、三一書房、一九七〇年、二九頁)
- 七一頁)
- (20) 「加藤任重漫録」(日本史籍協会編『維新日乗纂輯』二、東京大学出版会、一九八二年覆刻、三六五頁、三六七頁、三七二頁)
- (21) 宇高浩『真木和泉守』、菊竹金文堂、一九三四年、六一二〜六三三五頁
- (22) 「土佐藩国事史料」卷五三〔稿本〕同年五月是月、486〜487コマ)
- (23) 「隆祐卿手録」同年六月一五日条〔稿本〕同年六月八日条、444コマ)
- (24) 田村哲夫校訂『定本奇兵隊日記』下、一九九八年、マツノ書店、九頁
- (25) 前掲7『木戸孝允文書』一、三六〇頁
- (26) 前掲11『修訂防長回天史』四卷、二六八〜二六九頁

- (27) 前掲24 『定本奇兵隊日記』下、一四頁
- (28) 前掲8 『忠能』第一、一五頁
- (29) 「馬関攘夷従軍筆記」(下関市文書館編『資料幕末馬関戦争』、三二書房、一九七一年、一〇〇頁)
- (30) 前掲24 『奇兵隊日記』下、九頁
- (31) 前掲11 『修訂防長回天史』四卷、二七二頁
- (32) 前掲8 『忠能』第一、一四〜一五頁
- (33) 前掲24 『奇兵隊日記』上、九頁。同年七月一二日付池田忠兵衛宛土居佐之助書翰(平尾道雄『天誅組烈士吉村虎太郎』、大道書房、一九四一年、二〇四頁)
- (34) 前掲11 『修訂防長回天史』四、一八八頁
- (35) 『改訂肥後藩国事史料』卷三所収、侯爵細川家編纂所、一九三二年、九五三頁
- (36) 前掲7 『木戸孝允文書』一、三六〇頁
- (37) 前掲8 『忠能』第一、一四〜一五頁。前掲23 『隆祐卿手録』同年六月一五日程(『稿本』)同年六月八日程、445コマ)
- (38) 「有終齋日記」(『稿本』)同年六月八日程、442コマ)
- (39) 前掲8 『忠能』第一、一八〜一九頁
- (40) 前掲23 『隆祐卿手録』同年六月一五日程(『稿本』)同年六月八日程、445コマ)
- (41) 前掲8 『忠能』第一、三〇頁
- (42) 「文久癸亥日記」(真木保臣先生顕彰会『真木和泉守遺文』、伯爵有馬家修史所、一九一三年、五九二頁)
- (43) 前掲8 『忠能』第一、三一頁)

- (44) 宇高浩『真木和泉守』、菊竹金文堂、一九三四年、六四一頁
- (45) 前掲11『修訂防長回天史』四、一九〇頁
- (46) 前掲8『忠能』第一、三〇頁
- (47) 前掲8『忠能』第一、五七頁
- (48) 前掲11『修訂防長回天史』四、二〇〇～二〇一頁
- (49) 前掲8『忠能』第一、六七頁
- (50) 前掲42『文久癸亥日記』『真木和泉守遺文』、六〇〇頁
- (51) 前掲8『忠能』第一、六九～七〇頁
- (52) 前掲8『忠能』第一、八五頁
- (53) 拙著『龍馬、新発見』、中村武生歴史地理研究室、二〇二二年、一五三～一五七話、一八一～一八五話
- (54) 『京師日載』七月一九日条、山口県文書館蔵毛利家文庫
- (55) 前掲8『忠能』第一、九七～九八頁。同日付久坂・寺島宛忠光書翰（前掲2『天忠組の主将中山忠光』、口絵五頁上段）
- (56) 前掲8『忠能』第一、九七～九八頁
- (57) 『中山忠光奏聞書』（前掲17『楫取家文書』一、二三二頁）
- (58) 前掲8『忠能』第一、一三〇頁
- (59) 前掲42『文久癸亥日記』『真木和泉守遺文』、六〇六頁
- (60) 拙稿『天誅組再考』（『軍事史学』第五五卷第一号所収、二〇一九年、一六七～一七〇頁）に見通しを述べた

〔補記〕 脱稿後、文久三年（一八六三）七月晦日付備前岡山侯池田茂政宛（推定）吉成勇太郎（水戸家臣）書翰に接した（岡山大学中央図書館蔵「池田家文庫」マイクログフィルム、リール番号YSC1001、74コマ。浦出卓郎氏の教示）。忠光の至近にいた太田市之進や高橋熊太郎などから得た情報として、忠光による横浜（外国人居留地カ）襲撃計画にふれ、しかし忠光が本復し天子を加勢する方が千金の意味がある、全国数百万の有志が大いに勢いを得る、天子二〜三代はその遺風によつて気持ち張れ高々と述べている。水戸家臣による、天誅組拳兵約半月前の忠光への高い評価といえる。本旨を補強する内容であるため紹介する。